鹿児島の自然だより　第 247 号　　令和８年 11 月１日　鹿児島県立博物館発行

天文15

「別館開設60周年」

天文担当　片野田　裕亮

別館（宝山ホール４階）は、11月15日で開設60周年を迎えます。今回は、別館のこれまでの歩みを紹介します。

■　科学館から県立博物館別館へ


開館当時の県文化センター

1966年11月15日に、コンサートや演劇などを上映する大ホールを備えた文化館と、プラネタリウム室や恐竜化石展示室、理工系展示室などを備えた科学館が併設する鹿児島県文化センターが開館しました。当時、最新の設備を備えた九州でも屈指の施設となり、開館から半年で20万人以上の来館者が訪れました。

1981年には、旧県立図書館を改装し、県立博物館の新館（本館）が開館しました。それに伴い科学館は閉館となり、４階のプラネタリウム室や恐竜化石展示室は、県立博物館の別館として管理・運営されることになりました。

■　プラネタリウム室


開館当時のプラネタリウム室

直径10ｍのドーム型の天井と同心円状に配置されたリクライニング式の座席が、125席設置されました。投影機は、五藤光学研究所が開発した、国産初のレンズ投映式プラネタリウムであるＭ－１が導入されました。Ｍ－１は、4,500個の恒星を映し出し、南極の星空や年周運動なども再現することができました。当時は、解説員が手動でＭ－１やスライド投映機を操作しながら、季節に代表される星座や天文現象などを解説していました。

そして、1980年にＭ－１からＧＸ－ＡＴへと機種変更を行いました。ＧＸ－ＡＴでは、投影できる恒星の数が6,500個となり、各投影機をコンピュータ制御で動かすことで自動投影を行うことができるようになりました。現在もＧＸ－ＡＴを使用して番組を投影しています。

■　恐竜化石展示室・化石展示室


姿勢変更前の恐竜化石

恐竜化石展示室には、アロサウルスとカンプトサウルスの２体の北米産恐竜化石が展示されています。これらは、６、７割が本物の化石からなる全身骨格標本で、本県出身の八島太郎氏の尽力により、小川勇吉氏から寄贈されました。開館当時、恐竜化石の全身骨格標本は、当館のものを含めて日本に３体しかなく、非常に貴重なものでした。小川氏からは、これらとともに、三葉虫やアンモナイトなどの化石 434点が寄贈され、そのすべてが化石展示室に展示されました。

1991年には、小牧勇蔵氏の尽力により三葉虫や腕足類などの南アメリカ産化石 221点が、大野透太郎氏から寄贈されました。

また、2012年には、新しい学説を反映し、アロサウルスの姿勢変更を行いました。

開設以来60年にわたり、多くの方々の協力のもと、現在の別館の展示が形作られてきました。今後も、来館者に最新の情報を提供し、学びのきっかけとなるような展示の工夫を行っていきます。

別館では、開設60周年を記念して、様々なイベントを計画しています。詳しくは、当館のＨＰやＳＮＳをご覧ください。